キェルケゴールとドイツ語圏文学

川井義男

はじめに

キェルケゴールは、ドイツ文学と深い係わりを持った思想家であった。或いは、ドイツ文学が、と記すべきかも知れない。類稀な文学的資質に恵まれた思想家として、彼は同時代までのドイツ文学を貪欲に吸収した。キェルケゴールの中に流れ入ったドイツ文学は極めて広汎なものがある。一方また、後代のドイツ語圏の文学者はこの北欧の思想家に触発され、かつ裨益されるところ多大であった。即ち、思想家から流れ出て現代までのドイツ語圏文学に注ぎ込んだ水量もまた頗る豊かなものがある。おそらくこの流れは今後も涸れることなく続くことであろう。このことの経緯と内実については個々には比較的よく知られており種々論考もなされているのであるが、従来これを総括的に取り上げる機会は極めて少なかったように思われる。その事由は、問題が多岐にわたり作業が尨大に及ぶこと、かつまたそれが限られた紙幅の中で為される場合、事柄の性質上記述は網羅的となり、内容も勢い雑駁に堕さざるを得ないからであろう。本稿はこうした事情を十分に踏まえた上で、なおかつ北欧の思想家とドイツ語圏文学の係わりの全般について、紙幅の制約をあらかじめ考慮しつゝ、半ば学習的にではあるが能う限りの拡がりをもって俯瞰を試みようとするものである。その志すところは、単に便覧のためのアンソロジーを編むことではなく、些かなりとこれに

よってはじめて加え得るであろう新たな知見にある。

一

キェルケゴール自身がアネルセンと並び、デンマーク後期ロマン主義を飾る優れた文人と目されていることは改めて記すまでもない。デンマークロマン主義がこの時期、ドイツのそれの触発期をようやく脱して、この国独自の文芸思潮として興隆に向かっていたのに対し、源流であるドイツロマン主義はほゞはや終息に至り、その文芸の主潮はすでに写実主義の時代に移っていた。這般の事情については、我々がここでこの派の代表的作家の一人として、直ちにかの『インメン湖』の作者T・シュトルム（一八一七・八八）の名を挙げ、この人物が思想家の僅か四才年下であることを付言することで、自余の徒らな説明を省くことができよう。ところで、シュトルムはたまたま例の丁普係争の地シュレスヴィヒ・ホルシュタインの出身であった。しかし、晩年にハイベーヤとの友誼は生じたが、彼は遂にキェルケゴールとは相識ることはなかった。この地からはもう一人、Fr・ヘッベル（一八一三・六三）が、しかも思想家と全く同年に生を享けている。おそらくこの人物もまた思想家の存在をすら知らずに生涯を終わったことだろう。しかしキェルケゴールの方は、この劇作家の処女作にして出世作である『ユーデット』と次作『ゲノフェーファ』を早くもそれが出版された四〇年代のはじめに確かに手にしたのである。とはいえ、男女両性の対立の悲劇を描きつ、同時にそれが世界精神との闘いで挫折し破滅する個の悲劇―個と世界の相克の相であるとする、著しくヘーゲル歴史哲学に類似したドグマを掲げたこの人物に、思想家は殆ど共感を抱けなかったも

のと思われる。言及が全くといってよいほど残されていないからである。

かように同年代のドイツの文学者とは深い係わりを持たなかったキェルケゴールではあるが、そしてそのことは前述のようにデンマークがなおロマン主義のほてりの中にあったこと、加えて思想家の些かの早逝などを考慮すれば寧ろ至極当然と見るべきでもあろうが、これよりほんの一時代前の『若きドイツ』の文人たちは、彼の極めてよく親炙するところであった。即ち、H・ハイネ（一七九七・一八五六）、K・グッコー（一八一一・七八）、L・ベルネ（一七八六・一八三七）、N・レーナウ（一八〇二・五〇）といった人々である。尤も、これらの人々はなるほど我々の思想家よりもやや年長ではあるが、いずれも当時現存活躍中で、中には彼よりも長生きした者もある。従ってキェルケゴールにとって、彼らは心情的には全くの同時代人であったのであり、彼は最新のドイツ文壇の誰彼を論評乃至引用している心算であっただろう。そこで、『諸段階』の中で、「詩に見放された人々は有限（現世）のなかにおりて行って、遂に悪い意味の政治にたどりつく」とあるのは、正に政治的にラジカルで著述禁止や禁固の憂目に遭ったこの派の人々、特にその領袖グッコーを指しているであろうし、さらにまた「厚顔にも神の存在は退屈と結びついている、と言った者がある」という文で厚顔と名ざされているのは、まぎれもなくハイネである。因みにハイネは当時澎湃たる「バイロン・ハイネ熱」の中で寧ろロマン主義の新たなる旗手としてデンマークに迎えられており、思想家にとって早くから頗る親近であった。『歌の本』は彼の愛読するところであり、すでに最初の批評である「アネルセン論」の中でもこの人物は高く評価されている。ベルネについてもシェイクスピヤ論と関連して、同じく『諸段階』やその他の作品で幾度も引用されている。バイロンの使徒レーナウには長篇叙事詩『ファウスト』があり、『ドン・ジュアンとファウスト』の作

者Ch・D・グラッベ（一八〇一・三六）と並び、ファウスト像へのキェルケゴールの強烈な関心から確実に彼の読書対象となっていた。

多少否定的な口吻を伴ってではあるが、このようにキェルケゴールは総じて進歩的・政治的な傾向文学の徒であるこの派の文芸の動向を、強い関心を抱いて追っていたと思われる。ところで、文学史はこの時期、他方においてこれとは全く対照的に、政治的・社会的な野心から離れて乏しいながらも安穏な小市民的な存在に甘んじ、家庭の中の片隅の幸福を味わうことに満足する「ビーダーマイヤー」文学があったことを教えている。その代表は二人のオーストリー系詩人F・グリルパルツァー（一七九一・一八七二）とA・シュティファー（一八〇五・六八）であるが、両人は勿論この派の文学者は――他にE・メーリケ（一八〇四・七五）などがいる――思想家の殆ど注目するところとなっていない。尤もはじめのオーストリー系の二人に限って言えば、前者は『偽る者に禍あれ』の不評に嫌気して以後、生前その作品の大半を深く筐底に秘めて世に出さなかった人物であり、その『晩夏』へのニーチェの愛読が知られている後者の真価も二十世紀に至ってようやく弘通したといった事情があり、思想家の視線が届かなかったことは敢えて異とするに足らないかも知れない。ではあるが、やはり思想家が「若きドイツ」に熱く関心を抱く一方で、「ビーダーマイヤー」には強い興味を示さなかったという事実は、彼の資性と時代への意識を窺う上からもなにがしかの注目が与えられて然るべきであろう。なお、この時代のデンマーク文学界を支配した「メランコリーを主題としたバイロン・ハイネ思想」の線上に、右の三人を含めて論じている評家があるが、傾向的にはそうであるにしても、右に記した事情から（因みにメーリケの『旅路のモーツアルト』は思想家没年の作である）我々の思想家との係わりは薄いように思われる。[1]

さて、キェルケゴールが文学に最も耽溺したのは一八三〇年代であったとされる。この時期、前述の通りドイツロマン派は僅かに余喘を保つ体であったが、デンマークは寧ろその興隆期にあったから、思想家にとってドイツのこの派の文人たちは極めて親しいものであっただろう。事実、その係わりは前代に比して一段と豊かになる。先ず、Fr・シュレーゲル（一七七二・一八二九）の書簡体の小説『ルチンデ』が『諸段階』その他で引用されるのをはじめ、『のらくら者』のJ・F・v・アイヒェンドルフ（一七八八・一八五七）、自分の影を悪魔に売った『ペーター・シュレミール』のA・v・シャミッソー（一七八一・一八三八）は思想家のいたく愛好するところであった。そもそもこの派の理念とするロマン的イロニーは、改めて記すまでもなく彼の修士論文『イロニーの概念』の論究の対象であり、この著作をはじめ彼の諸作品中にはC・ブレンターノ（一七七八・一八四二）もA・v・アルニム（一七八一・一八三一）もL・ティーク（一七七三・一八五三）もグリム兄弟（ヤーコプ一七八五・一八六三、ヴィルヘルム一七八六・一八五九）も出て来て正に枚挙に暇がないが、今これらを一々取り上げることは到底紙幅の許すところではないので、悉くこれを省筆することとし、ここでは僅かに心づいた一二のことだけを挙げるにとどめておきたい。『反復』の後篇で作者名なしにドイツ語で引用されている四行の詩句が「冬の旅」などの歌曲で広く知られる北独ロマン派の詩人W・ミュラー（一七九四・一八二七）の作『永遠のユダヤ人』の一聯であることはいまや周く知られているが、これに関して、長らく作者不明であったこの詩の探求と発見の労苦を語ったH・P・ローゼの「キェルケゴールを読み理解するということはいつまでも特異であることを止めない。あらゆる文章・あらゆる言葉が極秘伝達である」[2]という一文は、思想家を研究する者にとって真に貴重な頂門の一針であると感じられる。そうした想いを抱いて読書す

るとき、『不安の概念』第四章に、「ひとは悪魔的なものは医学的に取扱われるべきだと考えてきた[……]特にホフマンの小説の中に出てくる医者がそうするように云々」の一節があることに気づかされる。E・T・A・ホフマン（一七七六-一八二二）がベルリンで大審院判事の職にあり昼は精励恪勤の司法官として活動し、夜は「ゼラピオン仲間」と痛飲する二重生活の涯の深夜の執筆から、妖気漂う独特の作品を仕上げたことは人のよく知るところである。それ故、ここでさりげなくホフマンを登場させたことは、職業文筆家たるキェルケゴールの一種の読者サービスであろうことは論を俟たないが、しかしまた、この悪魔的なものをや、ともするとゲーテのそれと無造作に同一視する傾きに対して、それとは一味違ったものを示していること、即ち、「在来の美学が遂に発見せぬまゝに、キェルケゴールによってはじめて名づけられたところのロマン派文学作品登場人物に特有な〈無気味な不安〉を展示している」[3]ことの証左として、読者に秘やかに注意を伝達しているのでもあろう。

二

時の流れをもう一つ遡る。古典主義からロマン主義への過渡期にあって尨大な作品を書き、その生前にはゲーテ、シラーをも凌ぐ人気があったとされる諧謔の作家J・パウル（一七六三-一八二五）も確実に思想家に読まれていた。『現代の批判』に、また『これかあれか』（第一部）に、当時流行語になっていたこの人物の造語「と仮定して」という言い回しが暗に諷されて出てくる。『酒中に真あり』では「もし人がキリスト教の真理に対するあらゆる証明を棄てるか、或いは反対する

時にも、キリスト教が十八世紀存続したということは残るだろう」といった諧謔的表現が引用されている。この作家はハーマンに連なるフモリストの系譜において、思想家に愛好されていたものと思われる。

キェルケゴールの蔵書目録から、彼がFr・シラー（一七五九・一八〇五）の十二巻本を所有していたことが知られているが、この劇作家は何故か思想家の作品中で殆ど引用されておらず、彼にとってや、縁遠い存在であったようである。どこか、「肌が合わなかった」のである。右の作品集の入手も、H・F・ローゼによれば、かなりの逡巡を経て行われたものであるらしい。[4] ゲーテがロマン派を病的であるとして斥けたことは知られているが、そもそもこの人物をロマン派との対決に誘い込んだのは他ならぬこのシラーなのであって、先に見た思想家のロマン派傾愛と考え合わせると、このことは両者の資質の相違として何となく我々を首肯させるものがある。J・W・v・ゲーテ（一七四九・一八三二）はしかし、人も知る通り思想家によく読まれていた。レギーネとの関係への関連から特に熱心に読まれたと思われる小説『親和力』や戯曲『グラスゴー』――『ヴェルテル』に先立って書かれ、後代からは凡作として余り顧みられていない――などの諸作品の中からの引用も少なくはないが、最も思想家の関心を集めたのは言うまでもなく、『ファウスト』で『影』には不幸な女として右の『グラスゴー』のマリー・ボーマルシェと共にグレートヒェンが挙げられていることは誰しもの知るところである。本来、ファウストはドン・ファン、アハスヴェラスと並び思想家にとってキリスト教外の実存の重要な側面を代弁する大きな理念であった。わけても彼が最も身近に感じた懐疑家ファウストの形姿は、すぐれてキェルケゴール的なデーモンであり、懐疑という実存のイデーとして彼に体験されていたのである。それ故またゲーテがこのイデーを曲げて自己

自身の人間的発展に即応する一契機と化してしまったことに対して、彼は「明らかにイデーを裏切る冒涜罪だ」として酷しい批判を投げかけている。[5] 若きキェルケゴールは自ら筆をとって、懐疑の果にえも言われぬ絶望へと陥るファウストを書こうと企てたとされる。が、これは成らなかった。彼のファウストについての考え方は、『日記』のほか『これかあれか』『畏れとおののき』の中でも見られる。要するに彼のファウスト像は、彼自身の模像として創作されたものであったのである。ところで思想家のゲーテに対する心情には共感と反発が入りまじっているように思われる。即ち、彼はゲーテの実存の偉大さに讃嘆し、畏敬の念をもって『詩と真実』を読むが、反面、『視点』に見られるように、その理念的世界観に対しては、「ゲーテ・ヘーゲル的」なひとりよがりとして反撥もしているのである。

啓蒙期から疾風怒濤時代にかけては、思想家の蔵書目録中に、今日では全く文学史の片隅に押しやられている二人の文学者の名前がある。その乱離骨灰な筋の展開がこの派の呼び名の由来となった戯曲『疾風怒涛』の作者F・M・クリンガー（一七五二-一八三一）と、ドイツ譚詩の基礎を据えたとされる『レノーレ』の作者G・A・ビュルガー（一七四九-九四）である。思想家の読書の幅広さを証拠立てる事実ではあるが、共にさしたる影響の発生はなかったように思われる（尤も前者には『ファウストの生涯・行為・地獄行』がある）。この時期思想家に最も大きな影響を与えたドイツの文人は北方の魔人J・G・ハーマン（一七三〇-八八）であった。思想家がハーマンに言及している作品は、このあとすぐに触れる『不安の概念』と『後書』のほか『受け取り直し』『畏れとおののき』『哲学的断片』『諸段階』の多きにわたっている。かの間接的伝達という伝達形式は正にソクラテス―ハーマン―キェルケゴールという系譜において成り立つものであろう。

著作の匿名性、微行、さらに『断片』という不思議な書名、これらはおそらくいずれもハーマンに由来している。『不安の概念』がこの人物のヒポコンデリーについての高次な解釈の引用で終わっていることを知る人は多いであろう。『後書』にはまたこう記されている。「私はハーマンに感激していることを隠そうとは思わない。[……]お前の墓がかつて顕彰されたかどうかを私は知らぬ。だが、私は知っている。お前が悪魔的な全力でパラグラフの制服を被せられ、列の中に挿入されたということを。その分類を通じて秩序に気配りする歴史家によって」。思想家におけるハーマンの意義を数行で要約することは困難であるが、その特筆すべき一つは、O・バーヤーが記す通り、彼がヘーゲルに対抗して、即ち理念的なもの体系的なものに対して闘うためにハーマンの力を借りた、ということであろう。(6) 右の『後書』からの引用の後半はそのことを端的に示している個所であろうが、ここにはまたはしなくも思想家の「歴史家嫌い」が窺われ、先に見た彼のシラー敬遠の秘密を解く一助ともなっているように思われる。ところで我々は先に思想家のヘッベルとの疎遠を見てきた。キェルケゴールの蔵書目録には、実はこのヘッベルと並びドイツ文学史上「白銀の時代」を築いたとされる鬼才H・v・クライスト（一七七七-一八一一）の全集も載っているが、この詩人もまた思想家によって殆ど言及されることなく終っている。ドイツ文学史上の三大悲劇作家の名を並記するとき、我々は即座に「歴史悲劇」の語を脳裡に浮べる。思想家は明らかに歴史悲劇を好まなかったのである。その根拠を我々はハーマンの歴史に対する考えを援用することで直下に理解する。ハーマンにとって、歴史はその中で神の救済プランが現実化される神の人類救済史である。全歴史はキリスト中心的であり、彼は何の世俗の歴史も識らないのである。キェルケゴールはその作品中に夥しい歴史上の人物やその事蹟を挙げているが、思えばそれらは悉く逸話的であって、お

よそ歴史を動かす体の人間、そのはざまで悲運に倒れる体の人物が語られることなどはなかった。彼の関心はあくまでも人間の生きざまにあったのである。『人類歴史哲学考』のJ・G・ヘルダー（一七四四・一八〇三）に対する思想家の疎遠も、おそらくまたこの延長線上で把えてよいだろう。啓蒙期の文人では、他にハーマンの友人でもあった宗教思想家F・H・ヤコービ（一七四三・一八一九）や理神論者M・メンデルスゾーン（一七二九・八六）の名が作品中に現れるが、これらの人々への関心は多分にハーマンとの関連もあってのことと思われる。ヤコービの全集六巻が蔵書目録にあるのは、これにハーマンの書簡が多く収められていたからかも知れない。しかし、この思潮の最も偉大な代表者G・E・レッシング（一七二九・八一）の名は我々の思想家との係わりの上で逸することは出来ない。周知の通り、『後書』の第二部はこの人物に捧げられている。また「飛躍」の概念はこの人の小論文『精神と力の証明について』に由来するとされている。悲劇『エミリア・ガロッティ』からの『賢者ナータン』からの、さらには『ハンブルグ戯曲論』からの引用が『視点』などにとられており、『不安の概念』（第三章）では『古代人はいかに死を描いたか』という「レッシングの美しい論文」の読書が勧められている。この人物についても、その北欧の思想家との係わりを正面から扱うことは紙幅の制約に抵触せずにはおかないだろう。従ってここでは敢えて一点だけの考察に記述をしぼることとする。

レッシングからの引用で最もよく知られているのは、『後書』に採られている次の言葉であろう。「レッシングは言った。〈もし神が右手には全ての真理を隠し持ち、そして左手には私を常にいつまでも迷わすという添え物つきでとはいえ、真理に向かってのたゞ一つの生動して止まぬ衝動を隠し持ち、そして私に向って、選べ！　と言うなら、私は謙虚に彼の左手へ身を投げかけ、そして言う

だろう、父よ、与え給え！　純粋真理はやはり貴方だけもものです〉。」レッシングには真理の所有者たらんとする思い上がりはない。かつ彼は真理という既製品の保持者であるよりも、真理獲得のための誠実な努力において生きる人間であったのである。この誠実な人間性は、我々の思想家に深い感銘を与え、共感を呼んだことであろう。なお、この右手・左手という表現は思想家自身が他の場所でも自分の著作の伝知に関して好んで用いたものであることは知られている。旧約聖書では由来「右手」が神の祝福を伝える手とされて来たことから、一般に彼は「宗教的著作」を右手で、「美的著作」を左手で書いたとされるのだが、その際勿論レッシングのこの言葉も重ね合せて解されねばならず、我々の思想家の用語の常として、それは必ずしも一意的でないニュアンスを絶えず帯びているものと見做すべきだろう。ともあれ彼はこの「右手と左手」の両種の著作を通じて、生涯をかけてキリスト者の実存思想を追い求めたのである。

なお一言つけ加える。レッシングもハーマンも実人生においては寧ろ不遇の人だった。我々の思想家はそこに『修練』に記されている「神を畏れる敬虔が世において苦しみを受けねばならぬ」という思想の実例を見たのかも知れない。両者に注ぐ思想家の視線は温かくかつ畏敬的である。

キェルケゴールに流れ入ったドイツ文学の検証を終えるにあたり、最後に我々はもう一人の人物の名を是非にも挙げねばなるまい。『酒中に真あり』の冒頭に掲げられたモットー「このような作品は鏡である。猿が覗いても、使徒の顔はうつらぬ」の源泉G・Ch・リヒテンベルク（一七四二-九九）である。ゲッチンゲンの教授で諷刺家であったこの人物の『警句集』は同時代人に周く知られながら急速に忘れ去られる。それが再び世の光を見ることになるのはニーチェによってであり、「ドイツ散文中復読に価する最良の書物」の一つとして最前列に挙げられるのである。

三

周知の通り我々の思想家は、特にコルサール事件以後、コペンハーゲンでは子供たちにまで囃し立てられる有名人であったわけであるが、その生前、「小国」デンマークの外では北欧のごく一部を除き殆ど知られてはいなかった。十九世紀の最後の三十年間に、キェルケゴールの一連の著作がドイツ語に翻訳される。日記からの抄訳も現れ、彼の強い影響はようやく二十世紀にいたって、初めて生ずるのである。ドイツ文学界に対する意義に限って言えば、最も重要な出来事は、デンマークで出版されたG・ブランデスのキェルケゴールに関する書物が早くも一八七九年にドイツ語に翻訳されたことである。そして、わけて重要であるのは、ブランデスがその書物の中で、H・イプセンに対するキェルケゴールのもつ大きな意義について注意を喚起したことにあった、とされる。即ち、キェルケゴールの影響の第一の現れは、折柄弘まっていた強いイプセン受容の波と波動が一致したことにあったのである。我々はこれから二十世紀に入っての思想家の影響について見て行くことになるが、それに先立って、十九世紀最後の年に死んだFr・ニーチェ（一八四四・一九〇〇）についてごく簡単に触れて置きたい。両思想家の間にはブランデスを介しての将に生じようとして生じ得なかった奇しき係わりがあるが（理由はニーチェの突然の発狂である）、このことは比較的人の知るところとなっているので委曲は述べない。しかしながら、人がキェルケゴールとニーチェを対置するとき、その謎めいた類似と不同は人を驚かさずには置かない。K・ヤスパースが、K・レーヴィットがこれに着目し[7]、我が国の和辻哲郎もまた『ゼーレン・キェルケゴール』緒説においてこれをとりあげているが、このこともまた人の多く知るところであろう。

さて、我々は次に北欧の思想家に係わる二十世紀ドイツ語圏文学のはしりとして、前述のノル

ウェーの劇作家H・イプセン（一八二八・一九〇六）と、それに続いてスウェーデンの劇作家J・A・ストリンドベルク（一八四九・一九一二）を取り上げる。この両人をドイツ語圏文学に組み入れることには、当然に拡張のそしりを免かれないだろうが、しかし前者は晩年の数年をミュンヘンで暮らしたのであり、後者の本邦への移入は当初独文学者の職分であったというような事情もあり、寛恕を願えないものでもないだろう。

富裕だった生家の没落により、或る薬剤師の家に徒弟となったイプセンは、青雲の志なお止みがたく、医師をめざして医学試験準備を始める傍らしきりに文学書を読みはじめる。それらの書物は町の「読書協会」か、もしくは或る蔵書家の英国女性から借り出したもので、この時期（四四、五年頃）ここで、キェルケゴールの著作と接触したことが推定されている。二十才頃から彼は劇作や思索の筆を染めはじめ、やがてノルウェー国民劇場の座付作者となって劇作家の道を歩み出すのであるが、早くも一八五九年の習作的な長詩『高原にて』にはキェルケゴール思想との接触なしにはおそらく達せられなかったであろう倫理的要求と審美的なものの不一致の自覚が表現されており、一八六二年の詩劇『愛の喜劇』――三組のカップルを対照豊かにかつ諷刺的な意図をもって活用し、いかに愛と結婚が一致していないかを明確にして行く、という筋――においても、思想家の余韻は見誤られるべくもない。しかし、世間一般からキェルケゴールと最も深く関係すると思われたのは、爆発的な成果を収めた彼の出世作『ブラント』であった。主人公の牧師ブラントは旧約聖書的な妥協のなさを特徴とする人物で、倫理的要求を極めて真摯にとるため近親の人間を次々と破滅させることになる。この戯曲で、雪崩に見舞われた主人公が神に向って絶叫しつ、雪に埋もれて死ぬ終末の場面が、さまざまに解釈されて論議を呼んだ。即ち、妥協なき態度の正当化――恩寵

が下されたのか、乃至倫理的要求を審美的なものが脇へ押しやったのか、一方が他方を排除する正反対の解釈の中で、この主人公のモデルにキェルケゴールその人が擬せられたのである。しかし、イプセンは後にこの作品がキェルケゴールによる励起であることをきっぱりと否認する。彼はノルウェーの牧師ランマースを考えたのであり、この人物は自由宗教的共同体を建設するために、五〇年代のはじめに国教会と関係を断ったのであった。イプセンによれば、「キェルケゴールは余りにも書斎的な扇動家であった。それに対してランマースは、ブラントがそれであるような野外扇動家であった」のであり、その点において、彼は寧ろキェルケゴールとは非共感的である、と表明するのである。[8] その事情は、ヘーゲル思想との関連性を頑なに拒んだヘッベルの場合と或いは似ているのかも知れない。

作風が似ていることもあり、ストリンドベルクはイプセンを終生激しくライバル視した。自伝小説の題名が示す通り、彼は「女中の子」であった。彼の母はかつて旅館の女中で、この旅館に投宿していた十二才上の詩人の父カールと知り合うが、結婚式を挙げたときにはすでに彼によって三人の子を得ていた。ここにキェルケゴールとのや、極端化された運命的相似がある。ウプサラ大学哲学科に在籍した一八七〇年頃の彼の導きの星は、シラー、ユーゴー、イプセン、ビョルンソンと並びキェルケゴールであった。特にこの人の著作『これかあれか』は彼に極めて深い印象を刻んだ。「キェルケゴールでもって彼は明らかに、彼にとっていまや価値があろうとなかろうとどうでもよく思われたあらゆる哲学体系に対する彼の遍歴を完結した。キェルケゴールと共に彼は思索することと書くことを現実の生の状況における実存的決定として把握した」と、彼の伝記作者ペーター・シュッフェは記している。[9] 及第しなかった卒業論文「ハコン・ヤール乃至観念論とリアリズムのた

めに」で、このウプサラ大生はキェルケゴールの方法を受け継いだ。即ち、大学の慣行に抗して、現代の芸術史的テーマがとりあげられる。二つの装われた書簡の形でAとBが、A・G・エーレンシュレーガーの悲劇『権力者ハーコン・アーテム』についての互いの見解を述べ合うのである。Aは過去数年間のストリンドベルクであり、これに懐疑的に答えるBは十年後の彼である。後にこの劇作家はまた、彼がそれを擁してパリへと乗りこむ戯曲『ダマスカスへ』の中で、キェルケゴール思想とのまぎれもない係わりを持つ。彼は均斉よく十七の場面を互いに対応させる。場面17の舞台装置は場面1のものを繰り返し、16は2と同じという具合に。即ち、このドラマトゥルギーはキェルケゴールの『反復』の概念によって励起されたものなのである。

さて、ドイツ語圏文学に対するキェルケゴールの影響の二十世紀における第一の現れは、オーストリーにおいて特に強烈であった。劇場都市ヴィーンにおいてのイプセンに対する驚嘆は非常に大きく、前述したそれに関するキェルケゴールの意義についてのブランデスの言葉は、この国でも深い印象を残したからである。ヴィーンは当時近代ドイツ語圏文学の中心地であった。この地ではこの時期新ロマン主義の潮流が強く現れており、その代表者はA・シュニッツラー（一八六二・一九三一）とH・ホーフマンスタール（一八七四・一九二九）であった。そしてこの両人とも、確かにキェルケゴールを読んでいたのである。後者が前者に『これかあれか』の借覧を願い出ている一九〇四年四月二十七日付の端書が残されている。その文面をたどると、二人はその後青葉の頃に、「ランデブー」を行い、名物のカフェにでも腰を据えて、北欧の思想家について大いに論じ合ったであろうことが推測される。たゞ、この端書の収められている『往復書簡集』を隈なく終りまで読んでも、残念なことに再びキェルケゴールの名が登場することはない。諸評家にも両人の作品に

ついて、取り上げて北欧の思想家との関連を指摘する者はない。思うに、この端書がとり交わされた年、シュニッツラーは四十二才、すでに『アナトール』『恋愛三昧』『輪舞』などの作がある、ヴィーン文壇の欝然たる大家であり、十二才年下のホーフマンスタールも『痴人の愛』など多数の作品を擁する時代の寵児であった。彼らの文学世界は確立されていたから、この時期に及んでのキェルケゴール読書がそれに何らかの変革を強いることはなかったのかも知れない。そもそもしかし、人間存在の脆さ、はかなさ、死の不安と漂う憂鬱は、両者の文学全般に通ずる特色であった。従ってキェルケゴールの著作は、彼らには極めて受容しやすく、かつ大いに関心をそそるものであったであろう。彼らはまた共に、優雅な気分と刹那的享楽を愛するヴィーン気質の濃厚な保持者であった。彼らの審美的生活態度の持つ問題性は、キェルケゴール読書によって一層明確に自覚され、そこに必ず強い内面の緊張を生んだであろうことは想像に難くないのである。

R・M・リルケ（一八七五－一九二六）もまたこのオーストリー新ロマン主義に属する詩人であり、いま述べた内面的緊張は、彼の場合にもまた中心的な意義を持つものであった。彼は早くからキェルケゴールに出会っており、この思想家のとりこになっていた。一九〇三年の夏パリでの孤独な生活を打切って、リルケはあてどない旅に出て九月ローマに移り住む。この数ヶ月、彼はデンマークの作家ヤコブセンとキェルケゴールをオリジナルで読むためにデンマーク語を学びはじめる。翌年二月八日、彼は、デンマークに生まれ育ちパリで破滅に瀕する一人の若い詩人の物語の筆を起す。『マルテ・ラウリッジ・ブリッゲの手記』である。彼はその後間もなく、実際にコペンハーゲンを訪れ、折柄公刊されたキェルケゴールの愛姪ヘンリエッタ・ルン夫人編集の『彼女に対する私の関係――セーレン・キェルケゴールの遺稿から』をいち早く入手し、八月十六日付ルー・A・

ザロメ宛書簡で、この手紙類の翻訳を日課にしている旨を報じている。また、同年十月十六日、少し遅れて出たラファエル・マイヤー編の『キェルケゴールの遺稿』も彼は読んでいて、出版元のドイツのユンカー社に、インゼル社ではルン版のドイツ語訳を出すらしいが、ルン版よりもこのマイヤー版の方が優れているので、こちらの訳を出版して欲しい、と申し送っている。リルケは、「不安な存在」であることを通じて人間の限界を探ろうとした。彼の問題はいかに悲惨の中から自由な領域に歩みいる「可能性」を見出し得るか、いかにして神の恵みに生きることができるか、であった。『マルテの手記』は何気なく読めば、たゞ死の不安をちりばめた、これという筋のない「モザイクのような」作品に思われかねないが、S・ステフェンセンの示唆に従ってこれを入念に末尾まで読むとき、それが『反復』におけるキェルケゴールと同様に、ヨブの嘆きを主人公の不安に満ちた苦しみの表現として用いつつも文学者実存の問題性を倫理的・宗教的なものによって止揚しようとするキェルケゴールとは異なり、それを犠牲にされた文学者として実存することの実存的肯定によって解決しようと苦闘する、若き詩人の懸命な物語であることが理解されるであろう。[10] リルケにとっては詩こそが生命であったのである。

ドイツ語圏文学界に対するキェルケゴールの影響の第二の重要な現れは、第一次世界大戦前後の激動の数年、文学史的にはドイツ表現主義の時代である。一九〇九年から一九二二年の間にキェルケゴールの全集がディートリヒ書房から出版されたこと、および哲・神学者たちが集中的にキェルケゴールに取り組みそれらの著作が現れ出したこと等で、北欧の思想家は当時一層よく知られるようになった。この時期にキェルケゴールに係わった文学者の中では、F・カフカ（一八八三‐一九二四）が最も有名である。彼は一九一三年八月ゴットシェットによるキェルケゴールの抄訳『士師

記』を手に入れ、「(彼の場合は) いろいろな本質的相違にもかかわらず、ぼくの場合と非常によく似ている。少くとも、彼は世界の同じ側にいる。彼はまるで友人のようにぼくの肩を持ってくれている」と日記に書き記す。最初の出逢いによって記されたこの一文は、彼とキェルケゴールとの関係を、そして関係のその後の推移をも直観的に実に見事に捉えている。即ち、彼は思想家に生得の親近性を感じながらも、その蔭に早くもやがて明らかになってくる「本質的な相違」を鋭敏に感じとってもいるのである。この両者のかかわりをめぐっては様々な議論があり、極めて興味深いものであるが、これに関しては先に論考を試みたことがあるので[11]、詳細はそれに譲ることとしたい。

この時期、オーストリーにおいても北欧の思想家への関心は途切れることなく続いていた。とりわけここではH・ブロッホ（一八八六・一九五一）の名が挙げられるが、この文学者についても以前に論考を行っているので[12]記述は簡略にとどめたい。彼の長篇三部作『夢遊の人々』には、主要な登場人物がそれぞれに抱くAngstという語が25も出てくる。それが『不安の概念』の定義するところと一々符合していて、我々をさながらこの著作の小説的「演習」に参加しているかの想いに誘うものである。やがて読み進むに従って小説家であると同時に思想家でもあった作者がこの小説の第三部に分綴した論文『価値の崩壊』の中で、我々は遂に「キェルケゴールが体験したあの絶対的なるものの〈残酷性〉に対する絶対なる不安」、「キリスト教信仰の究極的到達点としての〈畏れとおののき〉」などの表現に遭遇し、この作品への北欧の思想家の影響がたゞに『不安の概念』だけにとどまらないことを知らされる。ブロッホは他にもエッセイや書簡の中でたびたびキェルケゴールに言及しており、例えばE・フィエッタ宛の或る手紙では、キェルケゴールを「信仰なしには倫理的なものは決して把握され得ない」とする彼の見解の始祖、と呼ぶなど、彼が北欧の思想家の系譜

に連なる事実は誰の目にも明らかである。キェルケゴールの影響の第三の現れは、ナチズムと第二次世界大戦の時代、従って夥しいドイツ語作家が強いられたあの亡命の時代であり、ブロッホの作品の一部はこの時期に生まれたものである。トーマス・マン（一八七五－一九五五）は亡命中のこの時期、彼がその長篇小説『ファウスト博士』を執筆中、同じく亡命中の美学者Th・W・アドルノによってキェルケゴールのドン・ファン論文に注意を向けられる。俄か仕込みのキェルケゴール読書によって彼は、「それ（キェルケゴール思想）についての何の知識もなしになされたこの小説とキェルケゴールの理念世界との親縁性」を発見して訝かしみ、さらにはニーチェ＝マン＝キェルケゴールという当初予想もしていなかった精神の「近縁性」に驚かされる。これについても先に論考を試みたことがあり[13]、詳細はそれに譲るが、一つの補足を加えれば、K・サガウの言うごとくかの「大地震」が実はキェルケゴールの父の梅毒感染への恐れであったとすれば、ここにもこの小説との驚くべき符合が存在したということである[14]。

亡命中の窮乏生活の中で、マンの王侯のような豊かな生活を羨望する余りに遂に後年不和に至ったと伝えられるA・デープリン（一八七八－一九五七）に対してキェルケゴールの与えた影響は、マンを遥かに凌ぎ、或いはこれまでに挙げた誰よりも深いものであったと思われる。文壇登竜時の二十年代には殆ど無神論者に等しかった彼が、四十一年秋亡命先のカリフォルニアで妻・息子と共にカトリックに入信して人を驚かす。この回心に至る宗教的求道の道程・内面における「運命の旅」の始点が、渡米前の亡命地パリでの彼のキェルケゴール没頭にあったことは人のよく知るところである。彼の晩年の大作『一九一八年十一月』はこの大きな転回を挟んで成立した一大宗教小説で、第一次大戦の敗北に続く挫折に終わった革命の年の混濁のドイツに「キェルケゴールもしあり

せば」という仮想を縦糸とし、六年の歳月を要して書き上げられた畢生の力作である。デープリンの北欧の思想家の影響は次作『ハムレット、または長き夜は終る』においても、その「間接伝達」の手法自体を含めて濃厚に現れている。この作品はさらにそれが二部構成である点で『これかあれか』を、枠物語であって第一部で九つのメルヒェンが語られることで『酒中に真あり』を想わせるなど、この作家の最晩年の小説にふさわしくかなり手の込んだキェルケゴール踏襲の構成が意識的にとられている。主人公である戦争帰還者エドヴァルトの形姿は、さながら前作で作者が自らの分身として送り込んだカテーテル、北欧の思想家の徴行でもある高校一級教諭ベッカーが、時空を越えてそのまゝに東西冷戦前の世界に出現した趣があり、これもまた歴然たる「キェルケゴール小説」である。

最後に、現代スイス文学の二人の重要な人物M・フリッシュ（一九一一・一九九一）とF・デュレンマット（一九二一・一九九〇）が等しくキェルケゴールに深い関わりを有していた事実が述べられなければならない。

フリッシュについては、リップヴァン・ヴィンクル伝説を踏まえて一九五四年に成立した彼の長篇小説『シュテラー』の冒頭に、ヒルシェ訳『これかあれか』第二部からとられた二つのキェルケゴール・モットーが先置されたことをめぐって、諸評家の間で喧しい論争が行われたことが問題の発端となった。この論争は、その後、フリッシュが前作『ドン・ファン』執筆の途中ですでにこの『これかあれか』と取り組んでいたこと、その後彼が同書と並んで『修練』や『死に至る病』や思想家の日記類を読んだこと、その時期がたまたまシュテラー構想中と符節すること、さらに問題のモットーは、「状況から言って恐ろしくぴったりしていた」が故に、思い切って「読者の助け」と

してとられたこと等の事実が彼自身の告白から明らかになったことで、間然するところなく北欧の思想家との関連を証拠立て、終ったのである。[15]

デュレンマットは牧師の息子に生れた。チューリヒ大学の文芸学科に対する反感から、ベルン大学に移って10学期をキェルケゴールとプラトンの研究に費す。彼が企てた卒業論文『キェルケゴールと悲劇的なもの』は、残念ながら幻に終った。最後のゼメスターの間に、彼が作家デビューをしてしまったからである。デュレンマットの文学的出発はカフカであり、学生時代自室のドアにはニヒリストと肩書した名刺が貼りつけられていたと伝えられている。(但し、後年の彼はそう呼ばれることから寧ろ極力身を防いでいた節がある) その作品は概ね人間実存の絶望と深くからんだもので、しかもその悉くが甚だ寓意的でまた往々グロテスクかつ滑稽的であるが、「およそ一切の一意的なものはたゞイデオロギー的整復に基いており、かつたゞ真理の一部分でしかない」とする彼の認識から、かつまた構成の余りの奇想から、そもそもそれが何を寓意しているのかが直ちに読む者の了解に至らず、その多義性乃至暗号化のため極めて難解なものとなっている。本来の劇作のほか多方面にわたり彼は頗る多作であるが、これまで折々に作者自身から洩らされた片言隻句によって、放送劇『ドッペルゲンガー』(おそらく、「我々は神の前でいつも正しくない」という思想がテーマである) が、また劇曲『協力者、或る複合』(登場人物の一人警視総監コップのキェルケゴール思想に由来するとされるイローニッシュな形姿) が、特に我々の思想家に係わるものとされて来た。しかし彼は最晩年『塔建設』の中で自己発見の困難な道をふり返り「キェルケゴールなしには作家としての私は理解され得ない」という趣旨の重大な発言を残したのである。[16] かくて俄かに、彼の全作品のひとつひとつを改めてキェルケゴール思想の照明の下に点検し綿密に読みほどく

という、頗る魅惑的であると同時に少なからぬ困難性をも前途に予想させる課題が、我々の前に浮上してきた訳であり、この課業は現在もなお手つかずに残されているようであるが、時間の上からも紙幅の面からも、いまこれに取り組むゆとりは最早我々には全く残されていない。他日を期することとしたい。

（本稿は二〇〇〇年五月五日、キェルケゴール協会春季講演会における講演内容を加筆整理したものである。）

注

(1) 大谷愛人『キェルケゴールの風土――同時代のデンマーク文学（4）』（白水社『キェルケゴール著作集』月報16所収）参照。

(2) H・P・ローゼ『キェルケゴールの行路における謎の諸段階』大谷長訳。東海大学出版会、一六七頁。

(3) Cf. karl Heinz Bohrer, *Die Kritik der Romantik*, Suhrkamp, 1989, s.62-72.

(4) ローゼ前掲書、七・八頁参照。

(5) 杉山好「ゲーテとキェルケゴール」（白水社『著作集』月報16）およびS・ステファンセン「三つのファウスト像」大屋憲一訳（『キェルケゴール――デンマークの思想と言語』東方出版、一九八二年所収）参照。

(6) Oswald Bayer, *Zeitgenosse im Wiederspräche*. Piper, München Zürich, 1988, s.43.

(7) 秋山英夫『キェルケゴールとニーチェ』（理想社刊）およびK・レーヴィット『キェルケゴールとニーチェ』中川秀恭訳（未来社刊）参照。

(8) Gerd Enno Rieger, *Henrik Ibsen*, Rowohlt, 1981, s.49.

(9) Peter Schüize, *Augst Strindberg*, Rowohlt, 1990, s.24.

(10) S・ステフェンセン「20世紀ドイツ語圏文学におけるキェルケゴールの影響」(『キェルケゴール研究』14号所収、大屋憲一訳) 参照。

(11) 拙稿「キェルケゴールとカフカ」(同誌16号) 参照。

(12) 拙稿「キェルケゴールとH・ブロッホ『夢遊の人々』」(同誌20号) 参照。

(13) 拙稿「キェルケゴールと『ファウスト博士』」(同誌19号) 参照。

(14) 大谷長『キェルケゴールにおける大地震の今一つの説明——カール・サガウ著『貧めありや——貧めなきや』に関連して』(同誌6号) 参照。

(15) 拙稿「マックス・フリッシュへのキェルケゴールの影響」(同誌15号) 参照。

(16) Cf. Friedrich Dürrenmatt, *Über die Grenzen*, Piper, München Zürich, 1993, s.147.

キェルケゴールにおける女性と女性論の問題

森田美芽

序

現在、哲学の諸分野でフェミニズム批判が盛んに行われているが、キェルケゴール研究においても、様々な点で、従来のキェルケゴール解釈に大きな変更を促すものとなっている。本稿では、最近のキェルケゴールのフェミニズム批判をめざす諸論文を紹介し、その視点を分析し、こうしたフェミニスト批判がキェルケゴールの思想にどのような意味をもつか、考えてみたい。

まず、彼の思想と生涯から見られるフェミニスト的問題を列挙してみよう。

第一に、レギーネ・オルセンとの関係。キェルケゴールがその著作を捧げた「かの単独者」とはレギーネ・オルセンのことであり、彼女との関係が彼の中心的な思想的課題であったことはこれまでも認知されてきた。しかしそれがキェルケゴールの視点からの評価であり、レギーネの視点がきわめて手薄であったことは否めない。彼は恋人に対し、父権的、家父長的であった。(1)

第二に、彼の実存論そのものの問題点として。私たちは通常、「ひと」という一人称で語られたとき、キェルケゴールが「汝」と呼びかけるとき、また「人間は」と書き出すとき、それは本当に男女の別なく人間のことであろうか。

彼の実存の三段階の例でいえば、女性には別の段階が在る、ということを示唆している。女性